〈巻頭言〉

本を読まない話

真宗総合学術センター長・教授 浅 見 直一郎（東洋史〈中国中世史〉）

うたた寝の顔へ一冊屋根に葺き

という川柳がある。寝転がって本を読んでいるうちに眠ってしまい、それまで読んでいた本が顔の上にのっているのだが、それがちょうど屋根を葺いたような形になっている、という見立てである。なんとものんびりした情景で、日々仕事に追われる者としてはうらやましい限りである。

この川柳は江戸時代の作だから、この幸福な男（女）の顔の上で屋根になっているのは、和紙を綴じ合わせた、いわゆる和綴じの本であるはずだ。和綴じの本はサイズが大きくても軽いから、屋根にするには今の本よりも快適であったに違いない。現代の洋装本で屋根を葺くと、顔が圧迫されて夢見が悪いかもしれない。

それでも、現代の私たちにこの川柳の意味がわかるのは、当時と今とで本の形がさほど大きくは変わっていないからである。いつの頃であったか、パソコンで本を読む時代が来た、と言われたとき、私の頭にふと浮かんだのは、いずれこの川柳の面白さがわからない人が増えてしまうのではないかという、どうでもよい心配であった。しかしその後携帯端末が急速に普及し、サイズもさまざまなものが登場しているから、そのうちに屋根に葺ける機種が出現する可能性もある。

本には文章や図版などの内容とは別に、紙質・装丁といった具体的な姿かたちがあり、さらに蔵書印や書き込み、補修など、履歴とでもいうべきものがある。これらを仔細に調べていくと、その本が作られたときの状況や伝来の過程が判明することがあって面白い。時には全く予期していなかった事情が見えてくることもある。

もう20年以上も前のこと、東洋学の泰斗、神田喜一郎先生の旧蔵書が本学に寄贈されたとき、その中から善本94点を選び、書影に解説を加えて出版したことがある（『神田鬯盦博士寄贈図書善本書影』大谷大学図書館1988年）。私もその企画に加えていただき、『水経注箋』という本の解説を担当することになった。私は張り切って『水経注箋』について書籍解題の類を次々と調べ、それで十分な準備をしたつもりでいた。

ところが、いざ実物を点検してみると、驚いたことに、補強のため裏から貼り合わされた紙に、手書きの文字と割り印が残されていた。その文字を写し取り、苦心惨憺検討した末に判明したのは、この補強の紙が18世紀末に中国清朝のある地方官署で作成された公文書の断片である、ということであった。袋綴じにされた紙の陰から、200年ほど前の、無名の胥吏（官署の仕事を請け負う事務員）の実直な仕事ぶりが浮かび上がって来たのである。